
墮天使の行方-Second chapter-

種原美穂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

墮天使の行方 - Second chapter -

【Nコード】

N4032F

【作者名】

種原美穂

【あらすじ】

「何で……おれは、エリールを忘れなきゃいけないんだよ」「支配者」No.2の計画により、『狩人』であつた時の記憶と恋人と関わった記憶をすべて消去されたレイス。それから、アイカと共に平穏な日常を過ごしていた。しかし、そんな日々はある日を境にして、再び崩れてしまった。

IC・忘却の記憶

そこには、1人の少女がいた。

黒い髪の毛。ツインテールの髪型。黒い服の上から白衣を着ていた。

少女は、口を動かしていた。

何ていつているのかは、わからない。

けれど、口の動かし方で、どんな言葉を紡いでいるのかはわかる。

「れ

「い

「す

どうして、レイスの名を口にしてるのか、わからなかった。

少女は、にっこりと微笑んだ。満面の笑みだった。

徐々に、少女のすがたは霞んでいった。

笑みを浮かべたまま、少女は消えていく。

そのことは、どうでもいいと思っていた。

けれど。

少しだけ ほんの少しだけ。

心の奥で、

「悲しい」と思った。

FC-1・民間人保護会社「アイス協会」

アイカの隣には、レイスがいた。

そして今、アイカとレイスは王都にある星龍騎士本拠地の中にいた。

「レイスは、星龍騎士を辞めるのね」

そこには、星龍騎士のトップにいる星龍騎士初級マヌリエがいた。「はい。ずっと前からそのようなことを考えていました。なので

辞めさせていただきたいんですが」

「確かに。星龍騎士はいつ辞めようと構わない。他人がそのことに対して何も言うことはできない」

マヌリエは腕を組み、考えているらしい。

「だけど、今レイスに辞められると　かなり忙しくなるわね。新人を待つか。……はあ」

マヌリエは、溜息をついた。

「おれ、これから星龍騎士として習ったこの能力を生かした職業に就こうと考えています。もしかしたら会社を立ち上げる可能性もあるかもしれません。なので、お願いします」

「……そんなことまで考えていたのね。そこにいるアイカさんも、その……会社の設立に協力するつもりなのかしら？」

「そう考えています」

アイカが、マヌリエにそう告げた。

「じゃあ、しょうがないか。ま、これからの星龍騎士の未来は忙しくなるってことで」

マヌリエは、すこし悲しげな笑みを浮かべた。

「ありがとうございます。マヌリエ師匠」

レイスはぺこ、とお辞儀した。

「別に、規約に従っただけだしね」

「では　失礼します」

最後にレイスとアイカは深くお辞儀して、星龍騎士本拠地を出た。
「会社の設立か。……上手くいくといいわね」
マヌリエはそう呟いた。

そして1ヶ月後。

ようやく、レイスとアイカを中心とした民間人保護会社「アイス保護協会」は設立された。

「アイス保護協会」通称「アイス協会」は、たちまち人気を集めた。取締役のレイスとその秘書であるアイカは、毎日が忙しくなっていた。

「アイス協会」とは、民間人の保護を優先するために設立された会社だった。

何があっても民間人の保護を優先。それが「アイス協会」の掟だった。

「さて 今日仕事溜まっているし、ぱぱっと片づけてこようかな」

「アイス協会」取締役であるレイスは、忙しい日々を送り続けた。

「会社を設立してまだ1ヶ月も経過していないのに……忙しいな。ま、ありがたいことだけだ」

レイスは「アイス協会 王都支部」を出た。

今日のレイスの仕事は「魔物の退治」だった。

レイスは王都を出て、街道にいる魔物に目を向けた。

「はあ……。まあ、一発倒しますか」

気合いを入れ、鎌を取り出した。

その時、後方で何か殺気を感じた。

「？ ま、気のせいだな」

そして、レイスは魔物を何事もなく倒した。

「ふう、これで苦情が無くなるはずだ」

レイスはふと、思った。

ここ最近、魔物退治の依頼が異常なほどに多かった。それがどうしてなのかは、レイスにも理解はできないが、民間人の保護を優先するレイスにとって、その原因である「何か」を突き止めたいたい気持ちになった。

「そうだな。民間人の保護を優先する協会は、その原因を倒すべきだ。そうすることで民間人が安心できるなら、そうすべきだよな」

そして、レイスは最近の異常なほどの魔物の出現の根本的原因を倒す決意をした。

その時、後方に何か人気を感じた。

「誰かいるな。別に隠れなくてもいい。おれに用があるのなら、すがたを現すべきだ」

冷静に、レイスは告げた。

後方を振り向いたとき、そこには1人の少女がいた。

「……あなたは？」

「あ……はい。あたしは、王都の住民です。別に隠れていたわけでもありません。ただ……通りすがりなんです」

そのことに、レイスは恥をかいだ。

「申し訳ありません。疑っているわけでもありませんので。

あ、王都まで送って差し上げましょう。最近は魔物が多くて危険ですから」

「で、でも……。そんなの申し訳ないです」

「いえいえ。ついでですし」

王都の住民は困惑の表情を浮かべ、考えていたが結論を出した。

「じゃあ……お願いします」

「了解しました」

そしてレイスは、王都の住民を王都まで送った。

「あ……ありがとうございます。あたしの家まで送ってもらって、本当に申し訳ないです」

「いえいえ。本当に結構です。これが職業ですし」

「……もしかして、アイス教会の方ですか？」

「はい。取締役のレイス・ネフィリーと申します」

「す、すごいですね。じゃあ、これからもよろしくお願いします」

王都の住民はお辞儀して、家の中へと入っていった。

「よし、次は……荷物の運搬か」

レイスは、次なる目的地へと向かった。

先程レイスに送ってもらった王都の住民は、家へと入るなり、小さく呟いた。

「報告」

瞳を閉じて、そう告げる。瞬間、空間は淡い水色の光で満たされた。

『『支配者』No.4。報告せよ』

「了解。まずは、民間人保護会社「アイス協会」について。取締役レイス・ネフィリーは、現在我々の実験について何も干渉しようとしてはいない。同じく、『狩人』No.2だった者は、レイス・ネフィリー同様、実験については何も干渉しようとはしていない。現状が続けば、星龍騎士から10の秘具を奪還することも可能。とりあえず、簡潔に言えば問題なし」

『引き続いて、レイス・ネフィリーが『連』で封じた記憶について何も思い出しではないだろうか』

「いまのところ、問題なし。何も覚えてはいない」

『よろしい。では、これから『支配者』No.4にはある任務を遂行してもらおう』

「 何でしょうか」

『レイス・ネフィリーの抹殺。 もうすぐ『連』の効果持続期間が切れそうなのでね、その時間稼ぎだ。 もう充分に彼は我々のために頑張ってくれた。 もうそろそろ、我々の人形になってもらおうかと思っ
てね』

「 了承しました。 いつ実行すれば？」

『今日からでも実行してくれて構わない。 しかし、実行開始前には我々に連絡を入れてくれないか』

「 了解」

そして、空間は普段の光を取り戻した。

「 レイス・ネフィリーの抹殺か」

少女 『支配者』No.4は、ただ静かに呟いた。

FC-2・レイス・ネフィリー、抹殺

『支配者』No.4は、レイスを抹殺する任務を遂行するために、まずレイスを探索することにした。

「次は運搬だったはず。何処にいるかは知らないが　王都から離れていないのは事実……」

部屋の中で『支配者』No.4は、感覚を研ぎ澄ました。

「　発着場付近……。それに、未だに依頼人は到着していない模様」

早く任務を遂行することに意味はある。『支配者』No.4は、依頼人が到着する前に発着場へと向かった。

王都発着場へはすぐに到着した。

『支配者』No.4は、先程とは異なる変装をしていた。外見は完璧に異なる。元星龍騎士としても、『支配者』No.4の変装を見破れるはずがない。『支配者』No.4には自信があった。

レイスはすぐに見つかった。『支配者』No.4はその場に立ち止まり、感覚を研ぎ澄ます。

（　武器は、鎌を隠し持っている。ふうん……。へえ……。いつでも警戒心だけは持っている。だけど、先程よりはすこし警戒が緩んでいる。　今がチャンス、か）

『支配者』No.4は、レイスの現状を分析して、レイスへと近づいた。

「あの……。少しだけ時間を頂いてよろしいですか？」

先程とは声色も変える。完璧に別人を演じていた。

「あ……。はい。どのようなご用件ですか？」

レイスも気づいてはいないようだ。

「確か、あなたは……。あ、肩にゴミが付着しています」

『支配者』No.4は、レイスに接近する。

「あ、すいません」

『支配者』No.4は、レイスの肩の上に手を置いた。レイスは何も気に留めていないようだ。

「ありがとうございます」

レイスは笑みを浮かべた。

瞬間、レイスの表情が怪訝なものになった。

「な!？」

「……じゃあ、さようなら」

『支配者』No.4は、武器である棒術具を取り出した。

「金縛り……!？ 身動きが取れない!? クソ……。お前、何者だ!？」

レイスが叫ぶ。

「最期の我儘ぐらい、叶えてあげよう。あたしの名前は『支配者』No.4」

静かに、『支配者』No.4は正体を告げた。

「硝子の社ガラスリオンに連なる者か! まさか、『支配者』No.2の仲間か!？」

「ま、そういうことになるわ。これで我儘は聞いた。死んで

もらうよ。民間保護会社「アイス協会」取締役、レイス・ネ

フリー」

「……チッ」

レイスが舌打ちする。

「最期に忠告しておく。あなたは、計画を遂行するために必要な駒だった。今まで何の躊躇いもなく協力してくれて……。どうも、ありがとう。ま、あたしがアンタに感謝するのは今しかないから。じゃあ、さようなら」

『支配者』No.4は、棒術具を振り上げた。

(男のくせに、情けない。ま、いいか)

そして、レイスは『支配者』No.4の攻撃を受け続けた。

徐々に息は切れていく。『支配者』No.4はレースに同情せず、ただ棒術具でレイスの身体を叩き続ける。

しかし、心の中で、少しだけ　そのことを、悲しいことだと思ってしまった。

心の中にいるもう1人の『支配者』No.4が、必死になって叫んでいた。

「やめ……!!」と　。

王都の上空が雲に包まれ　やがて、雨が降った。

王都発着場にて、1人の少年は雨に濡れていた。

身体をつつ伏せに倒し、身体の所々に生傷が残っている。傷から血が溢れている箇所も少なくはない。

「ああ、もう……。レイスってば一体何をやっているのよ」

発着場に1人の少女が入ってきた。

「アイス協会」秘書であるアイカ・エリランヌだった。

「次の任務が溜まっているのに、何をボツサボサくとしているのよっ！」

アイカが次々と言葉を吐き捨てる。

「　て、あれ？　あれって……レイスよね？」

アイカが倒れているレイスを発見した。

「まさか……最近の忙しさに一気に疲労がレイスを襲って、あそこで寝ているワケ！？　な、何やってんのよ！？　こんな雨の中で！？　……ったく、ちよつとは常識を考えなさいっての！」

アイカがレイスのもとへ走る。

「ほら、レイス……。て……。何、これ……」

何も気づかず、アイカはレイスの身体に接触した。瞬間、手の平に血が付着した。

「　レイス……？」

アイカは、驚愕した。

どうして、おれは殴られているのだろう。

「どうして？」て尋ねても、誰も答えてはくれない。

そんな中で、1人の少女は、おれを見つめていた。

その少女が誰かなんて、おれは知らない。

その少女の近くまで歩み寄ると、少女は告げた。

「近寄らないで」と。

そのことが、何故かおれを悲しくさせる。

見知らぬ少女に「近寄らないで」と告げられただけで？

それが、どうしてなのか。

おれには、理解なんかできない。

けれど、そのことが頭から離れない。

ねえ、あなたは誰？

そう尋ねる。

少女は、

「誰でもないよ」と、

悲しそうに、苦しそうに　囁いた。

FC - 3・強くなる思い 消えてしまった想い

「 レイス！」

誰かの叫び声が、レイスの耳に響く。
頭が痛い。身体の所々が痛い。傷に響く。

「う……」

レイスの視界に光が差し込む。

「あの夢の中にいた人は……？」

思い出そうとする。しかし、思いだそうとするたびに、その少女のすがたが霧で隠されていく。

「 誰、なんだ？」

少女は白色のワンピースに身を包んでいた。黒髪を下ろしていた。

「……………」

「 ……レイス？」

アイカが不安げな表情で、レイスに呼びかける。

そして一瞬だけ 少女のすがたをハッキリさせなかった霧が、晴れた。

「 ……！？」

レイスは分かった。分かってしまった。
そこにいたのは……。

「 え、エリー……ル？」

そうだ。どうして忘れていたのだろう。
レイスの**だったエリールの存在を。
絶対に忘れるはずがない存在の名前を。
どうしてなのか 哀れなレイス自身に、レイスは後悔してい

た。

「……どうしてだよおおおっつ!!」

レイスは大声で叫ぶ。

「ちよ、レイス! まだ身体が安定していないんだから」

瞬間、レイスの視界が霞み、眩暈を感じた。

「う」

「レイス。わたしのこと、覚えてるよね?」

「……は?」

いきなり意味が分からないことを聞かれたので、思わずレイスは声が漏れる。

「……アイカだろ?」

レイスが当然のようにアイカの名を口にすると、アイカは口元を緩めた。

「はあ……。よかった……」

「あのな……。何でおれがアイカを忘れるんだ?」

「……だって、あんなに怪我、何があつたのか分からないけど……」

常識を超えていたもん。だって、発着場でレイスが倒れていたから……。

怪我ばかりして、オマケに今は骨折もしてる。でも、応急処置は施したから、とりあえず命に別状はないよ。でも、安静を保つのは当然だからね?」

レイスは、発着場で何があつたのか　思い出す。

硝子の社　所属『支配者』No.4という名の人物に殴られたことだ。

外見は、黒いコートを身に纏い、ファスナーは上までしっかりと閉めて、口元が見えなかった。

右手に琥珀色の棒術具を握っていた。

冷たく鋭い目つき。それは、何もかもを貫くかのような瞳だった。

「とりあえず、レイスの調子が復活するまでは、わたしがアイス協会を仕切ります。重要なことについては、ちゃんとレイスに話す。

だから安心して、回復に努めるといいよ」

アイカが微笑んだ。思わず、レイスも合わせて笑みを浮かべた。

「本当に　　ありがとな。アイカ」

「ま、これも秘書であるわたしの役目だもんね」

アイカは部屋から出ようとした。

「無理しちゃ、駄目だからね」

「分かってるよ、そんなの」

「約束だからねっ!!」

アイカが叫び、部屋を出ていった。

今更ながら周囲を見回すと、そこは「アイス協会」の事務所の救護室だった。

レイスの身体の所々に包帯が巻いてある。

「エリール……」

そして、***と思っ た彼女の名を口にする。

「て、あれ？」

レイスは不審に思う。

「***で、何だ？」

どうして彼女に対して***と思っ てしまったのだろうか？

彼女に**を抱いた？

レイスは怪訝な表情を浮かべる。

「エリール……」

再び、彼女の名を口にした。

「は　　……。意外と『連』の使用効果期限は短いものだな」

『支配者』No.2は、『連』を手にして寂しく呟く。

「『恋愛物語』は順調に進んでいるのかな？　ハッ、そんなもの関係ないけれどね」

その時、後方で誰かの足音が聞こえる。『支配者』No.2は耳を澄まして、その足音で何者が来たのかを把握する。

「 エリール、か」

『支配者』No.2は、すがたを見ていないのにそう呟く。

「まだあたしのことを、そうやって呼んでくれるんですね」

「まあな。こっちのほうがカッコいいだろ？ 本名の方がお前には似合ってる」

「……褒められても何もしない」

人物 エリールは呟いた。

「そういえば、見に行ったか？ お前の恋人、レイス・ネフィリー」

「 王都に、民間保護会社「アイス協会」を経営している。それぐらい、あたしにだって理解できる」

「……エリールってさ、レイスのこと、好きじゃなかった？」

「好きじゃないことを条件にしたのは、何処の誰？」

エリールが鋭い口調で、『支配者』No.4に告げる。

「条件をナシにした場合、は？」

「……変なことを聞くのね、『支配者』No.2」

「 じゃあ、敢えて干渉しないことにする。だけど、そのままでいいさ。……エリール」

「わかった」

「そういえば、何か用があるんじゃないのか？」

『支配者』No.2が話題を変える。

「あ、忘れていたけど……。『先生』が、あなたのことを呼んでいた」

「ふうん。エルフィード、か」

「『先生』で、そんな名前なんだ」

エリールが気に留めた様子で言う。

「エルフィード・オルナ。表では 硝子の社 のボスさ。まあ、実質でもそうであるんだがな」

「確か『先生』によれば、何かが原因で 硝子の社 をつくった。

『狩人』は『先生』の駒」

「まあ、『支配者』も駒であるのに違いはないんだがな」

「話がずれたけど、ちゃんと言ったからね。『先生』のところにへ行きなさい」

エリールが少し強めて言う。『支配者』No.2は、言う。

「次の『恋愛物語』のシナリオでも、エルフィードと相談してよっか」

そして『支配者』No.2はその場で消えた。

「テレポートか」

そして、エリールは呟いた。

「 エリール」

確かに、覚えていた。

エリール・クリスファアという存在を。

「…… だけど、エリールは今何をしているんだ？」

何故か、突然としてそのことを不思議と思った。

「** だったはずの存在、エリール・クリスファア。いつだってレイスは彼女にだけは**を抱いていた。エリールにだけ特別な**を抱いていた。」

「クソ…… エリールは**なのに、**なのに……っ!!」

思い出そうとしても思い出せない**。思えば思うほど、**という言葉がわからなくなっていく……。

「何でおれは…… わけもわからない攻撃を受けてしまうんだ……!!」

『支配者』No. 4の手がレイスの肩の上に置かれた次の瞬間、レイスは怪訝な表情を浮かべていた。

それは、レイスの身体が動かなくなっていたからだだった。

まるで重力が強い場所にいるかのように。しかし、レイスがいたのは王都の発着場だった。

「…… 何か薬を投与したのか……。おれの知らないうちに……」

考えようと思えば考えられることだった。

あらかじめ、『支配者』No. 4の手には針が仕込まれていた。

そして、レイスの肩に手を乗せた時に、針がレイスの肩に刺さる。突然、針が刺されたら当然違和感を覚えるので、違和感を覚えないうちに麻酔をかけておく。そうすれば、違和感なく針がレイスの肩に刺さる。刺さった針には身体が動かなくなるような猛毒が仕込んであった。それを食らったレイスは身体が動かなくなってしまう……。

こう考えれば、可能といえば可能だった。

「……そうしたことだったのか、奴め……。おれを殺そうとしたのか……。でも、おれは生きているし、命に別状はない……」

しかし、外見からして女性の『支配者』No.4の腕は、確かに強かった。

硝子の社『狩人』が『先生』の駒であれば、『支配者』とはいったいどういう立場なのか。その点が、レイスは気になった。

とりあえず、レイスは体調が完全回復するまで、最善の努力をした。

「何、かな。エルフィード」

『先生』の書斎に現れた『支配者』No.2は、『先生』に告げた。
「もちろん、無線でも通信しないってことは、大事なことを考えて結構かな？」

『先生』 エルフィードは、『連』を手にしていた。

「『恋愛物語』。『支配者』No.2であるキミがそう名付けた計画は、もう最終章まで辿り着こうとしている」

「ふうん。それで？」

「キミの後輩である『支配者』No.4くんは、今回の任務レイス・ネフィリーの抹殺に失敗しているようだ。まだまだ訓練が足りないのか知らないが、後輩の世話ぐらい、キミがしたらどうなのか、とボクは思うんだけど」

「いきなり話題をスラすのもどうかと思うけど。 で？ 呼び出したのは、どうして？」

エルフィードは、『連』を天井に掲げた。

「只今から、『天地計画』を再開する……！」

「……!？」

『支配者』No.2は、表情を強張らせる。

「な、なんでいきなり『天地計画』を再開させるんだよ!？」

「ボクたち 硝子の社は、『天地計画』を成功させる為だけに作られた組織である。　そう言っても、過言ではない。

硝子の社は何故、作られた？　その答えは、『天地計画』を成功させるためだ。だから、1度は崩れたが『天地計画』を再開させることにする」

エルフィードは、そう告げた。

「中止されていた　10の秘具　の回収も、今日からまた再開させる。『狩人』にはそう無線通信する。『支配者』はそちらでまた再開させてくれ」

「　　だろうな。エリール・クリスファアを実験体にする実験。こちら側で勝手に進行させていただく。　許可は？」

「構わないよ。あと、これまでになかったことだと思っけどボクたちを裏切った者を『狩人』にしてもいい、と思う？」

エルフィードが突然、そのようなことを言った。

「　　は？　1回裏切った奴だろ？　ていうか、別にエルフィードが必要と思えば『狩人』にしても結構だろう。『狩人』なんて所詮は駒。使えるか、使えないか。使えなくなつた駒なんて捨ててしまえばいい。その捨てた駒を偶然拾った誰かが修復すれば、再び駒として使えるようになる。そして、また使えなくなる。　　その循環にすぎない」

「エリール・クリスファアを対象とした実験を行い、その結果から得られたものを利用すれば　『天地計画』は更に、この世に素晴らしいものを、もたらししてくれるだろう」

「ふうん。……じゃあ、許可を得たことだし、実験を開始する。

用はそれだけか？」

「うん、それだけ。じゃあ実験、頼むよ」

「はいはい　　」

『支配者』No.2は、エルフィードの書斎を出た。

『全『狩人』に告げる！ 天地計画』を再開する！ よって、
10の秘具の回収を再開せよ！』

『先生』によつて、硝子の社『狩人』に、そのような無線通信
が広がった。

FC-5・再会、そして彼を傷つけないために

『天地計画』が再開したことにより、狩人は再び《10の秘具》の回収を再開させた。

まず狙われたのは、《10の秘具》を複数所持していると思われる星龍騎士だった。

狩人の一人である《幻想の死神》ソウマは、各地に存在する星龍騎士の支部に潜入、次々に殺していった。しかし、殺されただけで《10の秘具》回収にまでは至らなかった。

一方、時を同じくして、支配者側で実験が開始された。

エリール・クリスファアを利用した実験。「どうしてエリールは《10の秘具》の効果を受けないのか」。その理由を解明するためだった。

本来、対象者の記憶を操作することができる『連』。『連』の効果持続期限は長いはずだが、エリールはすぐに思い出した。つまり、記憶の操作ができていなかったのだ。

そこで『支配者』No.2は実験を行ない、原因を解明することになったのだった。原因を解明することができたら、それは「天地計画」を大きく躍進させることができるからだった。

「はあ……」

《硝子の社》本拠地・書斎にて、『先生』は溜息を吐いていた。

「『天地計画』も、やっと再開させることができた。支配者のほうも実験を開始した。悪いことなんて何も無い。そうだ、何も無い……けど」

むしろ、幸せだった。何もかも不自由なく、思い通りに事は進ん

でいる。

それなのに、『先生』に溜息を吐かせたのは　アイカのことだった。

アイカ・エリランヌ。それは、『先生』に多大な影響を与えた少女。愛し続けた少女。いや、今でも愛していた。

「けどアイカは、もういないんだ……」

そのことが、苦しかった。

「……やっぱり、アイカは必要だ」

アイカは「天地計画」を開始させるために必要だった『連』の一部の回収を成功させた。それだけではない。幾度となく「天地計画」のために貢献してくれた。

「捨てられた駒は、修復すればいいんだ……」

『先生』は立ち上がった。

「すみませーん」

「あ、はい」

王都にあるアイス協会本部に、誰かが入ってきた。現在、レイスは休養中のため、アイカ1人で仕事をこなしていた。

「今日はどんな用件ですか？」

「また今日も息子が魔物に襲われたそうよ。ほんと、何でこんなに魔物が多いのかしら。　アイス協会の方も一生懸命魔物を退治しているんでしょう？」

また魔物の出現。先程魔物は倒してきたばかりだった。

「はい。現在、最近の異常なほどの魔物出現の原因を解明しようとしています。解明されるまでは、できるだけ家から出ないようにしてください。安全を優先されるのなら、わたしがお客様をお護りしますのです」

「そうだよねえ……。はあ、あまり家から出ないようにしますか」

「そうしていただけると、被害も少なくて済みます。こちらも、できるだけ早く原因を説明しますので、もうしばらくお待ちください。……魔物が出現した、と言いましたね。今から退治してきます」

「本当にありがとうございます。お願いしますね」

そう言つと、誰かはアイス協会本部を出た。

「最近の、異常なまでの魔物の出現。誰かの仕業？ それとも、自然の仕業……？」

とりあえず、アイカは魔物を退治してくることにした。

「はああああああつ！！」

アイカは、王都近くの森で魔物を退治した。

「……それにしても、魔物を何度も倒しているはずなのに、数は減らないし、むしろ増えている感じが」

それがどうしてなのかはわからない。しかし、アイカはその原因を解明しなければならない。

その時、アイカは背後に人気を察した。

「！？」

振り向くと、そこには1人の男性がいた。

「……こんなところにいたら危ないですよ。王都もすぐそこですよ、わたしがあなたを護りますよ」

「……………」

男性は沈黙を保っていた。

「……あの？」

「……その刀は、その戦い方は、誰に教わったもの？」
突然の質問。

「あ、これですか？ わたしが幼かった頃、お兄ちゃんがいたんです。あ、本当のお兄ちゃんじゃないですよ？ わたしがただ、お兄ちゃんに憧れていたから、その人のお兄ちゃんって呼んでい

たんです。そのお兄ちゃんから教わったものです」

「そつか。『お兄ちゃん』は覚えてるんだね」

男性のその言葉に、アイカは不思議に思った。

「あ、お兄ちゃんを知ってるんですか……？　けど、お兄ちゃんは戦場に行った後は知らないし……。死んじゃったのかなあ……たぶん」

その時、男性が口を開く。

「いるじゃないか……目の前に」

「……え？」

当然、アイカは不思議に思った。

「……えーと、お兄ちゃんが目の前に？　あなたは霊でも見えるんですか？」

「違う。目の前にいる。……ボクのことだ」

「！？」

今眼前にいる人が、お兄ちゃん？　アイカには信じられなかった。その時、アイカの脳裏の中で、靄で隠されていた「何か」がハッキリ分かるようになってきた。靄が晴れた。

「何……！？」

靄が晴れた時……そこにいたのは、かつてアイカが恋してた相手。

「……お兄ちゃん……？」

《硝子の社》をまとめるボスがそこにいた。

「どうして……どうしてこんなところに……！？」

「『連』の効果持続期限が切れたみたいだね。ボクのことは思い出したかい？　その刀も、その戦い方も、教えたのはボクだ」

「違う。どうしてこんなところにいるの！？　わたしの『狩人』時代とエリールに関わった記憶も全て消して！　なのに、今更思い出して！　《硝子の社》は何をするつもりなの！？　どうしてお兄ちゃんはこのにいるの！？」

全て思い出した。『狩人』時代の記憶も、エリールのことも。

「なあアイカ。……また《硝子の社》に戻らないか？」

「！！」

それはあまりに突然過ぎた。

「な……何を言ってるの？ わたしはお兄ちゃんに甘えるのを止めて、レイスと一緒にアイス協会をやることに決めたんだよ。《硝子の社》もやめた。戻るわけにはいかない」

「《硝子の社》は、『天地計画』を再開させた。『天地計画』を成功させるためには、どうしてもアイカが必要なんだ」

「違う！ どうせわたしはお兄ちゃんにいいように使われる道具、駒に過ぎない！ わたしは道具として生きたくはない！ わたしは一人の人間でありたい！ だからお兄ちゃんから離れようと思ったんだよ」

そうだった。アイカは《硝子の社》を辞めた。お兄ちゃんにいいように扱われる道具ではない。

「……どうしても、か？」

「絶対に戻らない。わたしは、レイスと一緒に戦う」

「……そうか。じゃ、今からボクがレイスを殺す、と言ってもか？」
「！？」

それは、殺意を秘めた言葉。

「な、なんでレイスを……」

「もともと、レイスはもう殺されているはずだった。『天地計画』を邪魔する存在は真っ先に抹殺しようと思っていたからね。だから『支配者』No.4がレイスを殺すはずだった。けど、それは失敗に終わった」

「……だから、レイスはあるなにも傷を負っていたのね」

「だから、こうしないか？ アイカが《硝子の社》に戻ってくるのなら、レイスを殺すことをやめ、レイスの命を保証する」

「え？」

「アイカが戻らないなら、今からレイスを殺す。戻ってくるなら、命は保証する。これだけだ。……どうする？」

その選択は、選ぶようがなかった。

アイカが《硝子の社》に戻ったら、再びレイスとアイカは敵対することになる。「命を保証する」とはいえ、いずれはレイスも記憶を取り戻し、エリールを取り戻すつもりだ。そこで再び、レイスと敵対することに変わりはない。それはもう、嫌だった。

だからといって、レイスの命を奪うわけにもいかなかった。親しい人を、大切な人を……殺したくはなかった。

「……わかった」

エリールは決意した。

「《硝子の社》に戻る」

その言葉に、男性はニヤリと微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4032f/>

墮天使の行方-Second chapter-

2010年10月8日14時09分発行